

## 定番資料の再考

「きいろいベンチ」をいかに授業するか



加藤 宣行

### 1. 資料について

言わずと知れた、低学年の定番資料である。私は今年度、1年生の担任なので、自分の学級で本資料を使った授業を行うことができた。

### 2. 一般的な展開

どのような展開が一般的なのか、ちょっと興味があったのでインターネットで検索してみた。すると、1,000件以上がヒットした。

しかしそうと見たところ、その多くは、似たり寄ったりの展開になっている。この現象は、長短両面から考察することができる。メリットは、共通する展開案で様々な実践・検証が行われるため、いつでもどこでもだれでも、ある程度の質を保ちながら授業を行うことができる、普遍性をもたらすことができるということである。それに対してデメリットは、そのような「定番の資料に対する定番の展開例」が定着すればするほど、指導案に忠実な教師が、教師に忠実な子どもを育てるようになってしまわないかという懸念があることである。つまり、指導案どおりの進行に目が行ってしまい、その場で起きている子どもたちの意識の変容を見逃してしまわないかということである。

一般的な展開は、次のようなものである。

<導入>

・これまで、みんなのものをどのように使っていったか。

<展開>

・夢中でグライダーを飛ばしている時のたかしてつおの気持ちはどんなだったか。

・はっとして顔を見合わせた時の二人は何を考えていたか。

<終末>

・これからみんなのものをどのように使っていくと思うか。

いかがであろう。いかにも先が見通せる、ある意味安心して授業に臨むことができる展開となっているのではないだろうか。また、違う資料で同じような展開をした経験は、どの先生にもおありなのであるまい。ところで、その結果はいかがであっただろう。

もちろん、『ゆたかなこころ』(光文書院)にも本資料は掲載されている。違うのは、「はっとして、顔を見合わせた」二人の心情を考えさせる場面の発問である。『ゆたかなこころ』の指導書には、その場面の発問例として、次のように書かれている。

<発問>はっとした二人は、どのようなことに気づいたのでしょうか。

これは、「はっとした」状況を想像する発問ではない。「はっとした」原因はどこにあるのか、そしてそこから二人が再認識したことは何かというところまで、深く追究していく発問である。何かものを忘れたことに気づいた時もはっとする。すてきな人に出会った時もはっとするかもしれない。そのように、はっとする場面は多種多様なのである。はっとすればよいわけではない。そのような質の違いを、道徳的な観点から分析することが大切である。

### 3. 授業の実際

実際に授業をしてみると、資料を読み終わったときに、J君が、「はっとしたってどういうこと……」と、つぶやいた。私はその言葉を受けて、「うん、はっとしたってどういうことかな」と投げかけた。授業はそこから始まったのである。本来ならば、夢中でグライダーを飛ばしているシーンから順番に場面を押さえ、ていねいにあらすじ

を追っていくところなのにもかかわらず。

このように、実際の授業は予定どおりにはいかないのが常である。だから面白いとも言える。J君の発言を受け、子どもたちは次々に考えを出し合っていった。「はっとした」というのは、「あ、しまった！」という感じだから……と類推していく中で、次のようなまとめができあがった。

- ① グライダーがこわれた
- ② どうしよう、おこられる
- ③ あ！ 忘れていたことがあった

この分類は、もちろん子どもが出した言葉を使ってはいるものの、指導者が意図的に分けていることにお気づきだろうか。

①と②と③とでは、「はっとする」意味合いがまったく違う。つまり、「はっとすればよい」わけではないということである。だから、「はっとした」時の気持ちを漫然と聞いても、そのよき方向は見てこない。「はっとする」よさを考えさせなければ、本資料から道徳的よさを見つけ出すことができない。

そうならないために、手順を追って場面把握の心情を問う発問をしていくわけだが、そもそも国語の読解のように気持ちを聞いていくだけでは、①と②と③の違いが明確になるわけではない。そのことは、これまでの数多くの場面発問型授業の失敗例が如実に語っている。だからこそ、今、「わかりきったことを言わせない、考える道徳授業」が模索されているのである。

#### 【具体的な展開】

子どもたちは、はじめは①、②、③の立場で言いたいことを言っていたが、最終的には③の世界のよさについて気づいていく。(○は教師の発問、\*とアルファベットは児童の発言)

○：みんなは、①、②、③の、どの「はっとした」がいいですか？

(ほとんどの子どもが②に挙手。他者から注意を受けて自らの行動を反省し、改めるという受け身の意識・価値観が感じられる。)

○：①と②と③の違いは何ですか？

K：①は自分のことしか考えていない。

\*：ああ～なるほど。(多くの子どもたちがこの

K君の発言に同意する。この瞬間にK君の気づきが全体に広がったのである。)

Y：(それに対して) ③は、人のこと、みんなのことを考えている。

J：みんなのこともだけれど、自分のことも考えているよ。

○：なるほど、③はみんなのために、自分で反省できているから、自分も笑顔なのですね。

\*：そうそう、②は笑顔ではなく、怒られる、ごめんなさいって感じ。

\*：②も自分のことしか考えていない。

○：なるほどねえ。

Y：③はマナーを守れる人、ベンチの意味がわかっている人。

J：今日、朝の会で電車の乗り方を注意されたけど、この話ってそれと同じ。

\*：ああ、ほんとだ！

○：そうだね、同じことがあるね。どういうことだかわかるかな。

H：みんなが使う意味をわかっているなら、ルールはいらない。

○：そうか！ そうだね。確かにみんなのものを使う意味がわかっていてれば、ルールはいらないかもしれないですね。ルールがなくてもマナーを守れる人ってどういう人？

\*：③みたいに、考える人。頭のいい人。

○：それに気づいたみなさんも、きっと人から言われなくてマナーを守れる人になりますね。



#### 4. おわりに

このように、順番に場面を追って行かなくても、子どもたちの発言をもとにしながら本質に向かって思考を深めさせる事は可能である。むしろ、その方が、ストーリーを自然に把握しながら、じっくりと話し合いに時間をかけられるような気がする。

本資料を「反省教材」ではなく、よりよい生き方を前向きにとらえられるようにするための展開の提案として、ご一考いただけたら幸いである。